

河
鹿

井伏鱒二

河 鹿

筑摩书房

鹿 河

昭和三十三年十一月二十五日 發行

定價 四百貳拾圓

著 者 井 伏 鱒 二

發行者 古 田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 勝 畑 四 郎
東京都三鷹市上連雀九九〇

發行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(29)七六五一(代表)
振替東京一六五七六八
印刷 株式會社三省堂
製本 牧製本株式會社

河

鹿

目
次

ある 草 案	左 平 の 井 戸	丸 木 橋 に 關 す る 思 ひ 出	御 近 所 の こ と	御 隱 居 さ ん	河 鹿
--------------	-----------------------	--	----------------------------	-----------------------	------------

135	115	89	61	37	1
-----	-----	----	----	----	---

光田君のよこした地圖

老女の略歴

柳井のお大師山

小畠代官所

リンドウの花

157

169

197

217

257

河

鹿

去る十一月上旬、觀光關係の某雜誌社で、三名の客が甲府の湯村溫泉旅館に招待された。夕食を兼ねた座談會を催して、例によつてその速記を雜誌に出すためであつた。

招かれた客は、初老の小説家と、六十前後の洋畫家と、中年の婦人邦樂家で、いづれも東京在住の人たちである。この三人は、お互に東京では没交渉ぼつかうせふの仲であるが、三年前にもこの雜誌社の招待で一緒に修善寺へ行つたことがある。五年前には、一緒に越後の湯澤溫泉へ行つた。たつたそれだけの交渉だが割合お互に遠慮がない。

十一月上旬は、葡萄ぶどうの出盛期でざかりきである。婦人邦樂家は初めて甲州の農家を見たといふことで、座談會のときには、農家の屋根にかぶさる葡萄棚が氣に入つたと何度も繰返してゐた。婦人邦樂家、つまり三味線わいの上手な東京の姐さんだが、田園風景のことはよく知らないらしい。一方、洋畫家の方は、あんな葡萄棚は貧乏く

さいのだと云った。この人は、若いころ信州の生家を出奔して、甲府の裏町で葡萄に屋根を覆はれた長屋に住んでゐたことがあるさうだ。

座談會が終つて速記者が遅い夕食をたべはじめると、婦人邦樂家は風呂を浴びに立つて行つた。暫くすると歸つて來て、鏡臺の前で白粉焼おしろいやくのした顔を白く塗りながらかう云つた。

「たしか、甲府の城址に塔が立つてゐましたね。水晶のやうな恰好かっこうの、大きな高い高い塔、あれは何なのかしら。甲府は水晶細工の本場だから、水晶を象徵する塔なのかしら。」

すると、手酌で飲みなほしてゐた洋畫家が、ぷつと噴き出して、

「いや失禮。」と、婦人邦樂家に背を向けたまま云つた。「しかし、水晶を象徵するなんて、滅茶めっちゃを云ふもんだなあ。まるきり滅茶だ。でも、いま云つたことを、速記に取つとけば愉快だらうな。」

「だつて、水晶に似てるぢやないの。ちよいと長めだから、ブラジル産の水晶といふところなのね。」

「滅茶、云つてるよ。あんた、あれは明治政府の初期のころの、或る政策面を象

徴する記念塔ですよ。憚りながらあの塔には、麗々しく、謝恩塔と大文字で刻んであるんだ。」

「あら、道理でばかばかしい、大げさなものだと思った。」

「僕は、あの塔の話を持ち出されると、つくづく思ひ出したい人があるんだ。ついでに話して、聞いてもらふことにしますかね。」

洋畫家は自分の話に勢をつけるかのやうに、手酌でコップに酒をついだ。すると初老の小説家が、

「ちよつと待つて下さい。その話、速記に取つてもらひますから。」

さう云つて、ちやうど食事を終つたばかりの速記者に、「番外として速記を願ひます。番外として契約して下さい。」と注文した。

速記者は無表情な顔で、すぐザラ紙をしごいて鉛筆を持った。

次のやうな内容の速記である。

では、お話いたしますが、いま云つたやうに、あの塔は水晶なんかの廣告塔ぢやない。歴乎とした謝恩塔である筈なんだ。ところが、僕の感情の赴くままに云

つてみると、あれは惡政の記念塔だ。明治の代表的な惡政を象徵する、代表的な記念塔だ。

しかし第三者の前で、いきなりさういふ言葉を吐いては拙^{まつ}からう。僕の云ひかたは、感情的に偏してゐたと云ひなほします。いづれにしても、明治初期の政策は、徳川幕府の政策の大改修だつた筈だから、いきなり今のやうに云つては自分本位の云ひかたになる。何が故に、明治政府はそんな政策に出たか、何が故に人民に對してそんな無理を押しつけたか。そんな政策を政府が案出した理由たるや、幕府時代の制度がそれを誘^{さそ}ふ原因になつてゐたことは事實だらう。

尤も、僕の云ふことは、大正中期ごろ信州の田舎^{ゐなか}で仕入れた言説^{げんせつ}だ。僕は信州の片田舎の生れて、中學を出ると出奔して、甲府に流れて來て、甲府監獄^{かんごく}の近くの長屋にころがりこんでゐた。古ぼけた長つばそい平屋建の長屋で、屋根は葡萄の蔓に覆はれて、家のすぐ前に菖蒲^{しやうぶ}の生えた溝があつた。いつも水が澄^すんでゐて、じれつたいほど流れの動かない溝でした。僕等はその溝で顔も洗つたりしてゐたが、夜になると、その溝へ立小便して行く通行人がゐた。あまりにも非道^{ひど}いんで、あるとき一度、

「この野郎、待て。」

と云つて、飛び出して行くと、

「何が何だ。ぐづぐづ吐かすと、この野郎、ブッサラウぞ。」

と、突つかかつて來た。だから、もうそれつきり、いくら立小便するやつがあるても、じつと僕は我慢した。

僕がころがりこんでゐた家は、長屋のとつっきの家だから、長屋と溝に挟まれた路地の入口に當る。立小便するやつは、水とすれすれの低い石橋の上の端であるのだから、水音がすぐそこだ。強ひて詩的情緒をもつて云ふならば、せせらぎの音なんだけれども、現實では癪にさはる。

あるとき、かなりもう夜が更けて、一度に何人も石橋の上に並んで放尿する連中がゐた。先づ、一條のせせらぎの音が湧き起ると、

「關東の、連れしよんべん。」

と云つて、せせらぎの音が變化すると、次にまたもう一つ、

「甲州の連れしよんべん。」

と云ふ聲がして、音にまた變化が起つた。

それにつづいてまた、

「阿波^{あは}の連れしよんべん。」

と云ふ聲がした。

全く、水でもぶつかけてやりたい氣持がした。しかし僕のゐた家は、居間が八畳間一室だけで、家族は六十すぎの婆さんが一人だけで、僕が喧嘩に飛び出したつて頼りにも何にもなつたものでない。いつものやうに、婆さんは、夜なべ仕事^{あまはたずなり}の雨端硯^{あまはたずなり}を磨いてゐたが、連れしよんべんの音が止むと、

「あれは監獄へ、誰ぞ迎へに行つた歸りだよ。あの人らの誰ぞが監獄から出たんで、娑婆の仲間が迎へに行つた歸りだよ。」

「でもお婆さん、一人のやつ、阿波の連れしよんべんと云つてたよ。」

「阿波から流れて來たんだらうよ。もう七年も何年も前のことになるけれど、關東の連れしよんべんと云つて、橋の上から二人で小便したやつがゐたよ。あんなのは監獄を出た祝ひに、差入屋の手前の、煮賣屋^{にうりや}かどこかで飲んだんだらう。」

婆さんは十年も二十年もそこに住んで來た経験で、たいてい連れだつて立小便するやつは、たいてい關東の連れしよんべんとか甲州の連れしよんべんと吐かす

のだと云つてゐた。

この婆さんは、一言にして云へば轆轤孤獨かんかどくの身の上でした。東京の下谷の生れですが、淺草の烏鍋屋へ女中奉公してゐるうちに、下足番と懇ろねんろになつて世帯を持つた。ところが間もなく亭主に棄てられた。婆さんの口眞似で云つてみると、「あたしや、さんざん苦勞しつくして、流れ流れてこの甲府へ來て、この家に獨りで二十年ちかく暮して來た。」といふことでした。

婆さんとしては、おそらく淺草の烏鍋屋にゐたところが一ばん華やかな時代であつたんでせう。その烏鍋屋には、ときたま歌舞伎の千兩役者が家族づれて來たさうだ。

「そりやあお前さん、羽左衛門といふ役者さんなんか、水もしたたるやうないい男つぷりだつたよ。」

と婆さんは、同じく雨端硯を磨きながら二度も三度も云つたものだ。硯を磨くのは婆さんの夜なべの仕事だが、晝間は朝早くから差入屋に行つて、雑巾がけや土間掃除や皿洗ひなど、力仕事以外のこまごました雑用に任じてゐた。

僕が婆さんのところに下宿するやうになつたのは、甲府驛前で僕を婆さんのと

ころへ案内してくれた人力車夫の紹介だ。しかし僕は、甲府に來た最初からあんな陋巷に住む意志は毛頭なかつた。甲府に來た當初には、信州の生家にゐたころ親父やお袋が僕のために預けてくれた貯金帳を持つてゐた。現金は、小遣として貰ひ溜めておいたのを持つて出ただけで、甲府までの汽車賃にしか足りなかつた。

僕は兩親から割合に甘く育てられてゐたやうだ。それが家を飛び出たのは、親父が僕を檀家寺へ養子に入れて坊主にすると云ひだしたためだ。お袋は親父次第だから二人して僕を責めたてる。もう檀家寺とも誓約ずみだと親父は云ふ。お袋も、僕が三男だから、どうか坊さんになつて弘法大師のやうな偉大な聖僧になつてくれと無茶を云ふ。

中學校を卒業したばかりの若者は、出家遁世の志なんてもものには縁遠い。僕は家を飛び出して長野の驛で乗車する前に、親父とお袋に宛てた手紙を出しといいたが、今でもその文句は大體のところ覚えてゐる。

「御兩親様。私は出家したくないのです。父上は私が頭を丸坊主にしたくないから強情を張ると云はれますが、どうしても私はいやです。いくら私が父上の年をとられてからの子供でも、お寺へ忠義を盡される道具になりたくありません。毎

日毎日お寺へ行けと責められるのがつらく、ここに思ひきつて家出をします。不孝の罪はお許し下さい。私は決して青雲の志を持つてゐるとは云ひませんが、努力すれば一人で暮して行けると思ひます。しかし、つらくてたまらなくなつたら助けを求めに歸ります。私の行方を捜さないで下さい。逃げまはらなくてはなりませんから。」

大體、そんなやうな文句だつたと思ふ。

後でわかつたが、親父は非常に後悔して、お袋に、なぜ自分を諫めなかつたかと喰つてかかつたといふことだ。しかしお袋は、獅子が仔獅子を崖から蹴落す譬語をして親父の氣持を落着かせ、うちの三男は兩親に反いて苦學するために東京へ逐電したと近所へ吹聴するやうに親父を納得させた。しかも逐電した以上は、もうこれで檀家寺へも義理がすんだことになつたと入れ智恵したさうだ。もしこれが母性愛の發露だとしたら、僕は鼻白む思ひがする。僕の母親の生家には、座敷に「晴耕雨讀」と書いた額が掛けてあるが、晴耕雨讀といふ言葉は母親の氣性に何か通ずるところがあるやうだ。

そこで、甲府驛前の人力俵夫と僕との對面だが、僕が俵の溜り場の前を横切ら

うとすると、ずらつと並んでゐた俵夫のうち、よぼよぼの感じの老俵夫が、

「書生さん、安く行くけんど……。」

と蹴^け込^こみから腰をあげ、一と目で僕のことを家出人と睨^{にら}んだやうだ。

「けんど書生さん、宿屋へ行きやすか、桂庵^{けいあん}へ行きやすか。錢は、なんぼぐらゐ持つてゐやすか。」

と失禮な口をきいたので、

「現金は持つてないけれども、貯金があります。判も持つてゐるから、心配ない。ほつといて下さい。」

と僕が行かうとすると、あとからついて来て、

「書生さん、貯金帳で錢を下げに行つたら、國元の銀行か郵便局へ問ひあはせが行くよ。さうしたら、國元から傳票と一緒に、親御さんが連れに来るよ。」

と云ふ。僕は立ちすくんだ。

「書生さん。見れば、あんたの目の玉はまだ濁つとらん。何か、よくよくのことがあつたづら。」

老俵夫は僕を上から下まで見て、